

氏名(本籍地)	湯浅 阿貴子(千葉県)		
学位の種類	博士(学術)		
学位記番号	甲第73号		
学位授与年月日	平成28年3月16日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第1項該当		
論文題目	幼児期における道徳的規範意識の形成と保育者のかかわりに関する研究		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	押谷 由夫
	(副査)	昭和女子大学教授	藤崎 春代
		昭和女子大学教授	永岡 都
		大妻女子大学教授	柴崎 正行

## 論文要旨

本研究は、幼児の道徳的規範意識の実態を明らかにし、道徳的規範意識の形成を促す保育者の教育的かかわりについて考察し、提案することを目的としている。具体的には、①幼児の道徳的規範に対する認識と実態を、観察調査やインタビュー調査などを基に実証的に明らかにすること、②幼児の規範意識の形成に対する保育者の保育観と実践傾向について、質問紙調査やインタビュー調査を基に明らかにすること、③そして、保育者の実践知を体系的に図式化し、道徳的規範意識の形成を促す保育者の教育的かかわりに関するフレームワークを提案することである。

本研究は「Ⅰ. 研究の理論的枠組み」と「Ⅱ. 実証的研究」の2部構成になっている。

「Ⅰ. 研究の理論的枠組み」では、第1章で、本研究のテーマの主要な概念である「規範」及び「規範意識」が、本研究と関連する学問領域においてどのように捉えられているのかを明らかにしている。特に、本研究にかかわる幼児の「ゲーム遊びに見られる“ずる”」と「他者を傷つける言動」を中心的なテーマとして用語の整理を行い、研究の枠組みを設定している。

第2章では、幼児の規範意識に関連する内外の先行研究の整理を行い、その中で幼児の規範意識とはどのような視点で捉えられ、どのような側面から研究がなされてきたのかを分析し、今後の研究課題を見出しながら本研究の意義を述べている。

第3章では、幼児の道徳的規範意識の形成を促す保育者のかかわりを検討するための教育的な視点を明らかにしている。幼児の「主体性」と保育者の「指導性」は、対立的な関係になることも少なくない。基本的な善悪の枠組みや規範意識が形成されていく時期である幼児期の教育において、道徳的規範意識の形成を促すかかわりを考える上での理論的枠組みとして、岡田敬司氏の「教育的かかわりの四類型」を分析の枠組みに設定している。

「Ⅱ. 実証的研究」は、これらの理論的研究や枠組みを踏まえて、研究内容を構成して

いる。

第4章では、全国の幼稚園教諭(1080名)を対象に、幼児の規範意識が表出する場面の検討及び、道徳的規範意識の形成における現状と課題について、質問紙調査を行い、その回答結果から分析を行っている。その結果、幼児の日常生活の中で規範意識が表出される場面とは、「話を聞く場面」「片付け場面」「集団活動への参加場面」「慣習的場面」「公共物の使用場面」「協同を目的とする意見の摺合せ場面」といった、秩序維持、慣習的な内容で捉えられる場面であることを明らかにしている。一方、遊びの中での規範意識が表出される場面は「ゲーム遊び場面」「集団遊びの展開場面」「他者と自分の意見の摺合せ場面」「物や玩具の共有場面」といった公平・公正、他者との協同にかかわる内容で捉えられていることも明らかにしている。

第5章では、「ゲーム遊びに見られる“ずる”」と「他者を傷つける言動」の2つの課題について、幼児にインタビュー調査を行っている。その結果、調査対象者の幼児の多くが2つの課題に対して規範認識があることを明らかにしている。また5歳児ほど、相手の感情や実体験、身近な大人の価値提示を善悪の判断理由としていることを、コレスポネンズ分析から明らかにしている。

第6章では、全国の幼稚園教諭(430名)に対する質問紙調査の回答結果から、保育者の保育観及び実践傾向を明らかにしている。因子分析の結果、保育観では、自己主張や自己抑制といった「自己調整重視」と、「規範逸脱注意」の2因子解を抽出している。規範伝達をする際にどのようなことを重視するのかについての質問結果からは、「経験値」「年齢」「ルール生成」「見守り」「発達・自己充実」「自己主張」「自己抑制」の7因子を抽出している。

基本属性(園の公私、経験年数)を独立変数とする2要因の分散分析を行った結果、実践上「発達・自己充実」を重視する保育者は、初任者群にその割合が高くなること、私立園の保育者の方が「ルール生成」を実践上重視する傾向があること、「自己主張」は、初任者群よりも熟練者群の方が重視する傾向にあることを指摘している。

第7章では、保育経験3年以上の保育者10名を対象に、インタビュー調査を実施し、その結果を基に、保育者の実践知を体系的に図式化している。そして、「ゲーム遊びに見られる“ずる”」と「他者を傷つける言動」について、かかわり方を質問し、質的研究法M-GTAによって分析している。その結果、「ゲーム遊びに生じる“ずる”」と「他者を傷つける言動」についてのかかわりは、全体に共通して「実態を把握する」カテゴリーから「かかわり方の判断」カテゴリーを通して、「教育的かかわり」カテゴリーへと流れていくことを明らかにしている。そして、「ゲーム遊びに生じる“ずる”」に対する基本的なかかわり方は、〈権威的かかわり〉と、〈認知的葛藤的かかわり〉を中心としていることも明らかにしている。

また、「他者を傷つける言動」については、保育者がかかわり方を判断する際に、子どもに否定的な意図やふざけの意図、攻撃的意図をもっていることが明白であり、許容される余地がないと保育者が捉えた場合には、〈権力的かかわり〉の中でも厳しさを含むかかわ

りを中心としていること。自主的な気づきを促すために、〈権威的かかわり〉への移行を促す語りも見られること。その際の主要なコアキーワードが“Iメッセージによる感情の伝達”、であることも明らかにしている。それらを基に、道徳的規範意識の形成に関わる問題が生じた際に、保育者はどのようにかかわり方を見極め、かかわっていくのかについて、保育者の実践知を体系的に図式化している。

以上の実証的研究全体を通して、道徳的規範意識の形成には〈認知的葛藤的かかわり〉が重要であることに変わりはないが、〈権力的かかわり〉や〈権威的かかわり〉が〈認知的葛藤的かかわり〉の前段階として重要であること、そのことを踏まえて、発達の連続性を見通したかかわりを段階的に行っていくことの必要性を提言している。

## 論文審査結果の要旨

本論文の審査においては、研究の内容はもとより、その独自性や今日的意義等も含めて慎重に審議された。

申請者は長年幼稚園教諭として勤務しながら、大学院で学び、日々の保育で感じる幼児の実態や行動に常に注意を向け、理論的な研究と照らし合わせて保育を工夫するといった取り組みを重ねており、その中で作成された論文である。したがって、研究と検証が一体となっており、その意味でも価値ある論文であるといえる。本論文の独自性と成果は、大きく次の6点に集約できる。

第1は、幼児期における道徳的規範意識の形成に関係する内外の文献を読みこなし、本研究の独自性を明確にしている点である。研究者であれば当然のことであるが、膨大な文献に圧倒されることなく、その主要なものに丁寧に当たり、分類しながら、それぞれの研究分野ごとの特徴と課題を見出し、それらを統合する形で、本研究の独自性を明らかにしている。キーワードである道徳的規範についての定義に関して、関連する学問分野の定義を分析し、そこから研究文献の分析に入ったことも、多様な研究がなされているこの分野の整理に効果的であったと思われる。そのことによって本研究の意義が多方面から評価されることになるといえよう。

第2は、先行研究からの課題と本研究の意図とをつなぐ理論的枠組みを設定していることである。教育学の分野で研究が深められている教育的かかわりに着目し、岡田敬司氏の「教育的かかわりの四類型」を基に独自の分析枠を作っている。それらにより、先行研究から見えてくる課題と本研究テーマである保育者の具体的かかわりに関するフレームワークの提案とが連続性をもってとらえられるようになっている。権力的かかわり、権威的かかわり、認知葛藤的かかわり、受容的呼応的かかわりの4つをベースに枠組みを明確にしながら、実証的研究へと進めていくことによって、子どもの実態と保育者の対応をより精密に捉えることができている。

第3は、本研究から導き出された知見についてである。まず、全国の幼稚園教諭に対する質問紙調査を基に、幼児の日常生活の中で規範意識が表出される場面と遊びの中での規範意識が表出される場面を明らかにし、後者においては、「ゲーム遊び場面」「集団遊びの展開場面」「他者と自分の意見の摺合せ場面」「物や玩具の共有場面」といった公平・公正、他者との協同にかかわる内容で捉えられていることを明らかにした。

その結果を基に、幼児期の道徳的規範意識を、公平・公正、協同の価値意識を中心に考えて「ゲーム遊びに見られる“ずる”」と「他者を傷つける言動」に絞り、調査研究を行っている。その結果、ほとんどの幼児が「幼児を傷つける言動」や「ずる」に対して、「いけない」という理解を示していたこと、5歳児ほど、相手の感情を考えたり、嫌だった自身の体験や身近な大人の価値提示などを基に判断していることを明らかにした。

そして、保育者が、「ゲームにみられる“ずる”」や「他者を傷つける言動」に対してどのように対応するのかについて、因子分析を基に分析し、「経験値」「年齢」「ルール生成」「見守り」「発達・自己充実」「自己主張」「自己抑制」の7因子を抽出し、基本属性(園の公私、経験年数)ごとの対応の特徴を明らかにしている。また、インタビュー調査を基に、「ゲーム遊びに生じる“ずる”」と「他者を傷つける言動」についてのかかわりは、全体に共通して「実態を把握する」カテゴリーから「かかわり方の判断」カテゴリーを通して、「教育的かかわり」カテゴリーへと流れていくこと、基本的なかかわり方は、〈権威的かかわり〉と、〈認知的葛藤的かかわり〉を中心としていることを明らかにした。

それらの分析全体を通して、道徳的規範意識の形成には〈認知的葛藤的かかわり〉が重要であるが、〈権力的かかわり〉や〈権威的かかわり〉が〈認知的葛藤的かかわり〉の前段階として重要であると捉え、そのことを踏まえて、発達の連続性を見通したかかわりを段階的に行っていくことの必要性を提言している。

これらの知見は、既存の研究に新しい視点を提供するものであり、本研究の独自性として高く評価できる。

第4は、道徳教育研究という視点からの意義である。道徳教育研究は、幼児期における研究が大切だとされながら、多くの課題が残されている。幼児期の道徳性の発達を基にした理論的研究は進んでいるものの、実証的研究は、実態を明らかにすることに主眼が置かれ、実践的研究においては、事例研究的、エピソード記述的研究が多い。本研究は、それらをフォローしながら、道徳的規範意識に絞って、幼児の実態を基にしながらどのように保育者がかかわればよいのかを、明らかにしている。特に発達段階を重視した研究であることから、小学校との連携も考えやすい。道徳性の育成に係る保育者や教育者のかかわりという視点から、幼稚園から連続した道徳教育を考えていくうえで大きな貢献が期待できる。幼児期における道徳教育について研究するものにとって、基本文献の一つとして評価されるであろう。

第5は、理論的な押さえをしたうえで、観察調査や、インタビュー調査、質問紙調査などを基に実証的に検証を行っている点である。その分析においては、統計的な手法を用い

ているが、量的な分析だけではなく質的な分析にも適用し、客観的なデータで結果の分析と考察を行っている。その調査自体も、大変貴重なものである。保育者調査では、全国の幼稚園一覧から、園を抽出し、その園の保育者に調査を依頼している。また、多くの保育者に対する長時間にわたるインタビュー調査を行ったり、特定児の数年にわたる観察調査を行うなど貴重なデータの収集を心がけている。本研究の最大の特徴は、自ら課題意識を持ち、実践をしながら検証し、さらに研究を進めていることである。

第6は、理論と検証と実践とを融合させた研究である点である。多くの研究は、課題に対して理論的追究を行い、それを実証的に検証していくものが多い。本研究は、その面においても優れた分析がなされているが、そのことを踏まえて、さらに実践的な面にまで踏み込んで研究を行っている。教育に関する研究は、ややもすれば実践面が強調され、理論的な考察とのかい離が指摘される。本論文においては、理論的考察と実証的検証と具体的実践とが見事に融合されているといえる。

しかしながら、本研究は多くの課題をも残している。例えば、幼児の発達段階を考慮したより精緻な分析が求められる。また、幼児期における道徳的規範意識の形成を、より創造的、発展的な活動や遊びとかかわらせていくことも考える必要がある。さらに、教育基本法で明記している幼児期における人格形成の基盤づくりという視点から道徳的規範意識の形成をとらえ、保育者のかかわりについて、さらに分析を深めていくことができないか、といったことも課題であろう。しかし、それらは、本研究の発展として取り組めるものであり、このような課題を指摘できること自体が、本研究のレベルの高さを証明していると捉えることもできる。

以上のことから、審査員一同、本申請論文に対し詳細な検討を加え、慎重に審議した結果、本論文は、新知見を含む優れた論文であり、博士論文としてふさわしいと判断した。審査委員会は全員一致で申請者を本論文による博士(学術)の学位授与に値すると判定した。